

端材に新しい命を吹き込む -office Mokon-



officeMokon 代表 野中 朋子さん

高知県長浜のとある細い道に入るところにある、木工加工品工場のofficeMokon様。我々、高知商業高校ジビエ商品開発・販売促進部は、夏休み期間中に地元企業を取材する「インタビューシップ」を行った。(※インタビューシップは、「インターナンシップ」と「インタビュー」を組み合わせた取組)

もこん炉

そのほかにも、佐川おもちゃ美術館のたまごプールに使われているヒノキの木玉を3000個納品されるなど多岐にわたって活動を行っている。

officeMokon様は2018年に開始し、2020年に「もこん炉」を開発、製作を始めた。県内で使用された木材の端材や本来は処分されるはずだった廃材を使つた木工品づくりに取り組んでいる。

こん炉。その由来について聞くと野中朋子さんはこう語る。「もつこう×こんろでお互いの文字を少しずつとつて、もこん炉と名付けました。」

企業の努力

私たちジビエ部が取材した際、まず、大きな機械がたくさんあることに驚いた。野中さんの話を聞いていくと、置いてある機械はすべて木工品製作の際に使う機械だと言う。「ここにある機械たちは、中古品や譲つてもらつてきたものを自分で修理して使用しています。」その言葉を聞いたときに私たちはさらに驚くと共に、これは企業としての努力なのだろうと感心を覚えた。こういった固定費を削減しているからこそその価格提供であり、野中さんの物を本当に大切にすることです。

めぐり、つながる 地域に根ざす循環ものづくり

企業を知る

「まずは飾つて楽しむ。そして、大切にしたい時間に燃やし、その後自然に返す。」野中朋子さんはもこん炉についてそう語る。もこん炉とはどのようなものなのか。用途は、着火剤や焚火として使うほかに、飾つて楽しむインテリアとしても使われる。この特徴的な響きのも

編集後記

今回、officeMokon様を訪ねました。今回のインタビューシップでは、木工品の魅力などを知ることができました。その中でも野中さんの木工製作に対する熱い思いを知ることができました。その中でも野中さんの木工製作に対する熱い思いを知



高知商業高等学校
ジビエ部 Aチーム



ものメッセKOCHI2025
第14回高知県
ものづくり総合技術展

2025年(令和7年)
11月15日
土曜日

発行所
高知市立
高知商業高等学校
ジビエ部 Aチーム

協力
株式会社高知新聞社

号外

取材の様子はコチラ!
ものメッセ
KOCHI2025



Q & A からわかる 野中さんの思い

Q 日々作業する中で、ご自身が一番大切、又は意識していることは何ですか?

Q 働く上で、大切にしていることは何ですか?

A 一緒に仕事をする人は、必ず挨拶をするようにしています。

Q 高校生に伝えたいこと

A 今、やりたいと思つていることがあるなら、今すぐ行動すべき。その経験が腐ることは絶対にないから。

Q 「飾つて、燃やして時間を味わう」というコンセプトは、どのようにして思いついたのですか?

A 川の水はどこに向かって流れしていくのか、など循環については小さい時から考えていて、その考えが直結しているかはわからませんが、そのおかげかもしません。

Q 「飾つて、燃やして時間を味わう」というコンセプトは、どのようにして思いついたのですか?

A そうですね。やっぱりちゃんと睡眠時間を取ることですね。やっぱりちゃんと寝てないと、集中力がなくなつて、作業中に怪我をしたり、作品ができたとしても、自分が満足のいくものが作れなかつたりするから。パフォーマンスを上げるためにも睡眠の時間は一番大切ですね。

Q 「飾つて、燃やして時間を味わう」というコンセプトは、どのようにして思いついたのですか?

A 川の水はどこに向かって流れしていくのか、など循環については小さい時から考えていて、その考えが直結しているかはわからませんが、そのおかげかもしません。